



# W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第22号



## 還暦「モーツァルト広場」考

……聴いて欲しいモーツァルト その19

会員番号 K618 加藤 明

悦び愉しみ、嘆き哀しみ、怒り苦しみ、  
愛しさと憎しみ  
そんなひとつの人生に  
音楽は生きる  
モーツァルトという超越の音楽

小高い丘の上にひっそりと建っていた私の家に、物心ついたころコロンビアのSP盤で分厚いケースに守られた「美空ひばり全集」がありました。

父が趣味で買ったものと思います。

尾去沢鉦山の一角、三菱系の小真木鉦山地域に住んでいた昭和28年ころのこと。

父は興に乗ると家族や客人によく秋田民謡を唄って聞かせました。

私には「お祭りマンボ」にあわせて踊らせ、楽しませておりました。

「秋田船方節」や「秋田おぼこ」は子供ながらに上手いなあ、と感じました。

父は「うまいだろ？」とは言ったが、「父さん上手いな」とは言わせない距離のある人でした。

そんな父も唄っているときだけはいつも幸せそうでした。

敗戦後満州から命からがら引き揚げて故郷に帰った父にとって、美空ひばりや秋田民謡は大きな楽しみの一つであり、生活のなかのリズム

であり、生きるうえでの支えのようなものだったかもしれません。

それは音楽というものの人間に対する底知れぬパワーを暗示していました。

私はそんな音楽を愛する家庭に生まれ育ったことを幸運とと思ってきました。

私が後にバルトークやドボルザーク、シベリウスなど土の匂いがする民族色の強い作曲家の響きに惹かれる理由はこの幼時体験に拠るところが大きいと思っています。

いまでも、私のなかでは「ドンパン節」とハンガリー民謡とスラブ舞曲がいつも無理なく共存していますし、ひょっとしてジャズという麻薬に強烈に侵されたのも、そんな同様の背景があるのかもしれません。



筆者は今年が還暦の歳に当たっています（「おめでとう！」なんて仰言らなくて結構）。

数えてみると、唄の好きだった父よりも十年も長生きしてしまいました。

孔子の訓えでは「六十にして耳順う」（「みみしたがう」60歳ともなると他人の言葉を聞き容れて分別がつくもの）歳ということになりますが、何せここまでのプロセスが「三十にして立たず」だったり、「四十にして依然として惑って」いたりしたものですから、孔子の示す道からすると随分と踏み違えてしまった感概がしき

りです。

ただモーツァルトの音楽だけには正に「耳順う」ようにこだわり、持続的に時間を重ねているのですが、こちらの方も、「モーツァルトはこうだ」という不惑の境地には到底いたっておりません。

いや、我がモーツァルトは古典派だとかクラシックの人であるよりも、ヒップホップなみに現代の人であり、今日的な音楽ですから不惑の境地に棚上げするわけにはいかない、というのが真実かもしれません。

モーツァルトに出会って40年、驚嘆し拘泥して20年、そして、「モーツァルト広場」発足して14年、私のモーツァルトへの向き合い方について「モーツァルト広場」初期のドキュメントになぞって振り返ってみたい、と思います。



○1995年（平成7年）12月5日の第一回アニバーサリー（命日）コンサート。これはもう何といっても、手探りで扉をこじ開け無理やり開催にもっていった、という危うい処女航海でした。

唯ただナマのモーツァルトを聴きたい一心で、堀井淳司氏に「モーツァルトだけをやってくれ」と拝み倒し、ようやく実現したのだから。

参加者20名弱、一風変わった忘年会といった雰囲気でした（会場はイヤタカ5階）。

この日は堀井氏の呼びかけで、堀井氏率いる弦楽一座、ファゴットの池田氏やクラリネットの三上女史らの手馴れた演奏があり、ナマの楽器が奏でるモーツァルトの音色が私を直撃。

その楽しさに歓喜したのですが、まさに音楽の真髄に触れた感がありました。

この時の感動がその後の活動の励みになったことに疑いの余地はなく、終了後司会役の岡田女史と堀井氏と三人で打ち上げの幹事会を近くの居酒屋でおこない、予想以上の手ごたえを共に確かめ合ったことが懐かしく思い出されます。

この日の参加者20名の顔ぶれは各界さまざまな男女で、取り立ててモーツァルトに関心のあ

る方は幸いにもいらっしゃらなかった。

当日のゲストは堀井氏と私の言うことを効いてくれそうな、（賢い）友人知人に声をかけて募りました。

ですから、みなさん開会前は一律に不安な面持ちで、恐る恐る謎めいた未体験の忘年会にやってきた、という印象でした。

しかし、そんな皆さんのお帰りの際の表情は一律にからだに良いものに出会ったかのように自然な笑みがこぼれ、明らかに感動の喜びといったようなものが見られたのです。

このことはナマの演奏を間近で聴くことは貴重な体験になる、ということと、やはり、モーツァルトの音楽が広く人々に受け容れられるものであることを驚きとともに実感した始まりでもありました。



○1997年7月22日、初めてのサマーコンサートをイヤタカで開催し、翌98年も共にオーケストラを要した交響曲や協奏曲などの大曲に挑みました。

本格的なチラシを作ったのもこの頃からですが、会場には180名を超えるゲストが狭いホールを埋め尽くしました。

第1回、2回とも指揮を佐藤滋氏に依頼し、長谷川留美子さんのソプラノ、加藤顕一氏のフルート、池田知巳氏のファゴットと多彩なソリストにご出演いただき、とっても好評で、プログラムや企画の成功を幹事の皆で喜びました。



このように、当初から「モーツァルト広場」は多くの秋田在住の優れた演奏家やモーツァルト愛好家の皆さんに育まれてきたのです。

○1999年7月21日に第3回サマーコンサートを初めて久元祐子さんを当地に招いて開催しました。

この年の1月に会報「モーツァルト広場」の創刊号を発行。

「この会報を機に、より多くの方々にモーツァルトを識っていただき、共に探検の旅を楽しんでくださることを切に願うものである」とは創刊号の末尾に載せた私の表明ですが、ずいぶん力んでいたんだなあ、と赤面を禁じえない。

その後、年2回の発行を継続し（今回第22号）休みなく発行できたことにホッとしているし、とりわけ創刊以来ともに休みなく書き続けてこられた幹事の佐藤滋氏には感謝しています。

（酒とモツの日々）その音楽とモーツァルトへの崇高な慈愛の精神に対しては、こうべを垂れる思いできました。

今回第13回のサマーコンサートで連続11回目のご出演となる久元女史ですが、初めて「広場」で演奏くださった曲は、ザルツブルク時代の若きモーツァルトの傑作ピアノ協奏曲K 271の「ジュノム」でした。

日本ではめずらしい学究肌のモーツァルティアーナ久元女史とおつきあいが始まるきっかけは、女史の著した「モーツァルトのクラヴィーア音楽探訪」（音楽の友社）を私が書店でみつけ、お知らせがあった女史のレクチャーコンサート（横浜）に出かけて直接ご本人にお会いし、藪から棒にご出演の依頼をしたことを嚆矢とします。

この「ジュノム」、指揮は北嶋智仁氏でオーケストラはプロデューサー役の堀井氏が中心となって地元の演奏家にお声をかけてもらい、手作り感のある（従って温もりがある）オーケストラで、とても素敵なおものでした。

久元女史のこのときの演奏はいまだに鮮明に

脳裡に焼きついています。

もっとも、私はリハーサル段階で女史のピアノリズムとモーツァルトのナマの音色に全身的に侵され、溢れる感動に身震いすることが一度ならずありました。



この「ジュノム」第二楽章アンダンティーノは青年モーツァルトの憂いそのままに、とても魅力的な情感あふれるものですが、久元女史のこのアンダンティーノは音楽をより善く奏するというはテクニックだけでは体現できないものだ、ということをお訓えてくれた名演でした。

振り返ると、この「ジュノム」がその後の「広場」運営の方向を決定づけた、と思います。

それほど、衝撃的な事件でしたが、久元女史のモーツァルトに対する真摯で謙虚な姿勢と「広場」の矯激なるモーツァルトへの思いを余すところなく受けとめる音楽へのしたたかな愛情と受容の精神があったからこそ、と反芻するのです。

筆者は己れの楽しみのために「モーツァルト広場」を発信しましたが、立場こそ違えどかか久元女史にも同様の原質をみる思いがありました。

つまり、音楽を純粹に音楽として楽しむ精神、といったようなものです。

名誉会員として会員番号をお奨めしたら、「今回演奏するジュノムで！」と即答されたときには、危なっかしい航海に出た「モーツァル

ト広場」を育成したいという直覚的な心榮えがその自然な応接に広がっていました。

この時の久元女史の温かな眼差しと励ましの言葉はその後の「モーツァルト広場」運営にあって、時として、迷い疲れる私の背中を心強く後押ししてくれるものとなったのです。



2006年1月、モーツァルト生誕250年祭と広場の結成10周年を兼ねたコンサートをアトリオン音楽ホールで開催したことも記憶に新しいところです。

あのコンサートは私にとっては夢の実現そのものでした。

あの湧き起こる興奮は生涯忘れることが出来ずまい。

こうして振り返ってみますと、いかに多くの偉大な先輩・友人・演奏家、そして会員の方のご支援が熱いものであったかが判ります。

もし「モーツァルト広場」らしさ、といったものがあるとすれば、それはこうした関係各位のモーツァルトと音楽へのしたたかで高邁な心意気が自然に培ってきたものと考えております。

ここで、関係諸兄（諸姉）に対して今までのご支援に感謝申し上げ、冒頭のモーツァルト礼賛のことばをめぐらせて、還暦というひとつの節目にあたっての小文とします。

悦び愉しみ、嘆き哀しみ、怒り苦しみ、  
愛しさと憎しみ  
そんな独りの魂に  
音楽は生きる  
モーツァルトという天空の音楽

## 昼下りの道で

会員番号 K478 岡部 久子

ファゴット協奏曲がなっているー

下校時の道で出会った  
学校帰りの自転車の高校生達  
白いワイシャツが光っている

木漏日はちらちらと  
道端からは草の匂い

なつかしい学校帰りの時間  
なつかしい道草のとき

しゃがんで取った ツユ草 コバン草  
あの角をまがれば  
まだ残っている 駄菓子屋 一軒

六月の梅雨の晴れ間  
昼下りの道で  
小石をけったら

出会ったのは17歳の  
モーツァルト

(注) ファゴット協奏曲 変ロ長調 K191

## 名演というもの

会員番号 K332 片岡 元

私がクラシック音楽へ興味を持ち始めたのは小学4～5年生あたりからである。名前も知らない指揮者の振る『運命』と『新世界』がセットされたLPとお決まりのサラサーテが一枚。教材のような曲ばかりであるが感動したせいかまっさらの頭にはよく入り込みひととおりに暗記するまで繰り返し聞くはめになった。

中学校へ上がって校舎まで10分ほど商店街を通うことになったが途中でS書店という本屋があって、よく立ち寄った。思えば私に今も続いている立ち読み癖をつけさせた書店である。

当時はFM音楽のエアチェックが流行っていた。感度のいいラジオと出始めのカセットテープレコーダーが家にあったので、私も廉価版ながらFM録音を楽しみ出した。

しかし新聞の番組欄は見たり見なかったりで気がついた時は目当ての放送は終わっているということがよくあった。情報不足である。ところがその書店にはFMの番組表が掲載されている薄めの雑誌が置いてあった。週刊FMだった。驚くべき事に向こう1週間の番組内容が、しかも二色刷りで（クラシック番組はワイン色である）掲載されてある。以降毎週のように店に立ち寄っては上から2冊目あたりの表紙が痛んでいないものを手にした。表紙は演奏家の写真がとても綺麗に印刷されているので、保存するため汚れたりしわのあるものは買わないのである。表紙は今でも数枚保存してあって、クリストフ・エッシェンバッハは新々のピアニストで、クール、知的な風情が好ましかった。まだ、ムーティは駆け出し。ギリリス、ヤノビッツなどが来日して記事になっていた頃である。

週刊FMには、多種多様の情報があって勉

強になった。ステレオの組み方から海外音楽情報、新盤紹介などがあったが、楽曲それぞれに『名演』というものがあるらしいことなどが解った。アイネ・クライネ・ナハトムジークはワルターのがいろいろとあって、その放送日がわかると密かな喜びを持ちながら、録音テープもより高級なものに変えて録音にかかるのだった。そして（他に比較するものがないので）なんとなくこれが名演かと納得していた。

スピーカーは10センチ一つなので、いわばフルレンジ。大した低音など出ないけれどコリオリン序曲などは静かな夜に聞くとなかなか小さな迫力が感じられるものであった。後に読んだ某評論家の一節にあるようにしっかりとした演奏（曲）である限り、再生装置の優劣なぞ問題とするべきことではないのかも。

やはりカラヤンは有名だったのでLP12枚のセットを買って（もらって）聞き出したのもこの頃である。それにはモーツァルトではリンツ、アヴェ・ベルム・コルプスなどが入っていたが、美しい演奏だった。評価の分かれるジョージ・セルのモーツァルトの40、41番の交響曲は吉田秀和の評論を信用して大学に入ってから暗記するほど聞いた。これも名演かと思いつつながら。

魔笛は、NHKの放送で好きになった。昔はなぜか教育放送でよく放映していた。オペラばかりは、字幕スーパーに頼らざるを得なく、LPではどうにも楽しめない。夜の女王はたしかカリン・オットーという歌手だったと。暗い部屋でじっと見ていたものだからますますミステリアスなもので、自分にとっては密かな名演だった。このように青年期は、独りの趣味の孤独さゆえ、細々とした情報をたよりに名演とやらを模索しつつ聞き漁っていた。

名演とはどういうものか？自分にとってその条件の一つはやはりテンポだと思う。それは歌いながらも早さが加速するようなテンポ感。例えばアルゲリッチの演奏はかなり好きな方だが部分的な快速性に叙情がうまく乗っている瞬間、名演だなーと感動する。第九交響曲で最終楽章のコーダで破綻しても速度をあげ続けて一世を風靡した指揮者もいるし、やはり常人を超えた早さの前に人は陶醉することが多いのではないだろうか。

一方で俗な面からは名演とは人が羨み少し嫉妬するような演奏（会）とも。自分は、かつて10センチのスピーカーで聞き始めた音楽に対するウサバらしをするかのように、数年前から来日するオペラ公演を求めて上京するようになった。

完璧なオケに比類なきソリスト。無敵なアリアに長大なレシタチーボ。しかし、そういった

極上体験は音楽好きの友達にはあまり言えないことである。

「ウイーン国立のコジは良かった」「ムーティはやはり貫禄あった」とか「フリットーリはすごく綺麗な声だけど大柄すぎるし2幕目のあの太ももはちょっと…」などと言おうものなら、たちまち白い目で見られることになりかねない。

どなたも感じられることと思うが、どんなLP、CD、DVDなどを見聞きしても、演奏家の息づかい、音の圧力、観客の拍手を伴うライブには叶わない。コンサートホールにこだわらずライブには必ず感動が伴うものである。特に演奏家と同じ目線で楽しめる当広場のサマコンの夏がくるたびに、今回はどんな名演に巡り会えるか期待が大きくなるのである。

## 洋上のモーツァルト

会員番号 K475 川野義廣

60歳の定年を機に好きなことをしようと温めていた夢、その内の一つが地球一周の船旅だった。最初は北回りだったが、3ヶ月余の航海は長いようで短い。終えてみて、どこか物足りなさを感じるところがあって、2回目は南回りにした。とは言っても、「飛鳥」とか「さくら丸」のような豪華客船に乗ったわけではない。人間なら100歳に達しようかという老朽船ではあるが、誰に気兼ねすることもなく、普段着のまま地球を一周する生活空間が格安料金で売られているのである。

ところで、1,000人近くの老若男女を乗せた船は概ね1週おきに寄港する。午前中に着いて午後遅く出港したり、ニューヨークやシドニーなどの大きな港には、2～3日停泊することもある。寄港地では様々なオプションツアー（有料）が組まれていて、ほとんどの人はこれ

に参加するが、その国の治安状態などによっては、1人あるいはグループで自主行動を楽しむ人たちも多い。普段の船内生活は、静と動の企画物が目白押しで忙しく立ち回っている人もいれば、私のように何もせず、ただただボケーッと海と空を眺めて過ごすだけの人もいた。私は予定に縛られるのが大の苦手なので、あそこではアレをしよう、コレをしようなどとは考えず、万事に行き当たりばったりの行動が多かったが、なかでも音楽にまつわる体験は、まさに行き当たりばったりの出たとこ勝負がもたらしてくれた僥倖であり、貴重な体験だったと思っている。以下はその紹介と管見のような感想である。

北回りの旅では、ロンドンに宿泊した折にホテルが一緒だった仲間から、ロイヤル・アルバート・ホールのコンサートに行かないかと誘われた。もちろんOKである。夕食を終えてから彼

の後にくっついて出かけたが、厄介になったのは会場までの道案内だけ。後は自前で、とのことで、だから切符の購入などは臆することなく図々しくやるしかなかったのである。かくして残席の位置と料金は手差し語で確認し晴れて入場！やれやれの思いで中に入って度肝を抜かれたのは、赤いカーペットのホールに座る者、寝転ぶ者がウジャウジャたむろしていたことである。座席は適度な傾斜をもって馬蹄形のホールを取り囲んでいるので、否でも応でもこうした集団の立居振舞を目にしなければならない。ほとんど若者であったが、中にはオジサン・オバサン然とした同輩の姿も目に付く。いずれ、演奏が始まるまでの一種のリラクゼーションなのだろうと様子ながめていたら、なんとそのままの状態が演奏が開始されたのである。中にはわざわざ舞台の端に両肘ついて下から奏者の顔を覗き込むようにして聴き入る者もいて、この行儀の悪さはいったいナンナノダ！と、呆気にとられてしまった。この夜のオーケストラはスエーデン放送管弦楽団で、一国を代表するオー

ケストラだけに、失礼に当たるのではないかと心配したのだが、事前に注意する風はなかったし、しかも、こうしたことで物議がかもされたなどの話しは聞いたこともないから、ごく普通に許容されている光景なのかも知れない。もちろん、正確なところは分からないが、それにしても、冠に“ロイヤル”のつく芸術の殿堂での光景である。日本なら菊の御紋章が鎮座まします冒すべからざる場所柄ではないかと、彼我の国情、文化の違いに驚天動地の念を禁じ得なかった。

ノルウェーのベルゲンでは、グリーグが生涯を終えるまでの20年間を過ごしたという邸内（現在は博物館となっている。）を見学した。実は、私たち夫婦の結婚式の披露宴でBGMの一部として、ペール・ギュント組曲の第1番から『朝』の部分を拝借していたこともあって、興味津津の念いで訪ねた場所である。聞くとところによると、声楽家でもあった奥さんは、グリーグのピアノ伴奏で彼自身が作曲したリートを歌っていたという。今でも当時とそっくりのミニコンサートが行われているようで、万緑の木立に囲まれた質素な造りの家と庭を巡りながら、ほのぼのとした二人の仲睦まじい情景を想像したものだ。ところがである。一緒に見て歩いた山の神サマは、私の気持ちとは裏腹に、グリーグ・WHO?といった様子で、スローペースの私をやたら急かすばかり。超現実世界に連れ戻されること甚だしいものだった。

一方、南回りの旅ではシドニーのオペラハウスで得がたい体験をした。この時、私はニュージーランドのオーバーランドツアーからシドニー港に停泊中の船に戻ったばかりで、シドニー滞在に残された時間は半日だけだった。キャビンに荷物を置いてすぐに目と鼻の先にあるオペラハウスに向かった。目的は演奏会の催し物を確かめることだった。貼り出されたポスターだけ



ノルウェー・ベルゲン  
グリーグの家 グリーグ立像前



カナダ  
バンクーバー港を背に

では理解が及ばないので、チケット売り場で身振り手振り語、はては単語の筆記まで駆使して、やっと夜8時からのチケットを購入できた。料金は日本円で6,000円ほど。手渡されたプログラムから、ヘンデルの名曲を集めた演奏会であることは理解できた。

さて、改めて身支度を整えて出かけたのだが、みな紳士淑女の装いである。極端に照明を落としたロビーにはワインやコーヒーを販売するスタンドが設けられていたが、意外だったのは飲料水が無料だったことだ。旅行中はレストランを含めてどこでもペットボトルを購入しなければならなかったから、私は迷うことなく水のサービスを所望した。演奏会場では蝶ネクタイを締めた初老の紳士が懇懇な物腰で座席へ案内してくれた。やがて演奏が始まった。演奏の合間には指揮者が曲のエピソードなんかを紹介しているらしく、会場からは時に笑い声がもれたりする。ソプラノとカウンターテナーによる『オンブラ・マイ・フ』の独唱は、張りのある美しい声音に魅了された。圧巻だったのは、300人の合唱団による『メサイア』のハレルヤコーラスで、会場を埋めた聴衆が総立ちになったこと。目の前に突如としてデカ尻の塀が幾重にも出現し、私の目は舞台から完全にシャットアウトされてしまったのである。イエス様を信ずるが故の自然発生的な行動なのだろうが、こんな時、無信心な異邦人はどんな態度をとるべきなのか？なす術を知らず、一人だけ身を硬くして椅子に

座り続けたが、奈落の底に落ち込んだような気分、居心地の悪さを感じた一時ではあった。

ところで、肝心要の我らが親愛なるモーツァルト氏はどこへ行ってしまったのか？南回りは一人旅だったので無聊を慰めるためにCDを持参した。種々雑多な音源の中に6枚組のモーツァルト名曲ベスト集も加わっていたが、一日の終わり、パソコンに日記を書き込む時のBGMとしてよく聴いた。中でも『アヴェ・ヴェルム・コルプス』（K618）は、この曲が流れると手を休めて聞き入るのが常だった。つぶった目の奥底がジーンとして熱いものがブワーッと盛り上がってくる。この名状しがたい感情のたかぶりは何なのだろうかと自問してみたが、つまりは良いものは良いのであり、大好きな曲になったのだと結論付けるしかなかったように思う。戦後小説の旗手と評された大岡昇平は、無類のモーツァルト好きとしても知られた人だが、K364の『協奏交響曲』が大好きで、「二日も聞かずにいると、何となく消化が悪くなるような気がした」と書き残している。そして、「好きとなったら、どんな小曲でも好きだ」とまで言い切っているのだが、大いに共鳴できる言葉だと思う。なぜなら、この「好き」という一点に関しては、理屈など必要としないからである。今でも表面だけのモーツァルトファンでしかないのだが、それでもK618は私にとって珠玉の1曲となってしまったのは事実である。3ヶ月余の船旅とい



カナダ・カナディアンロッキー  
ビクトリア山とレイクルイーズを背に

う非日常の生活が気持ちをメランコリックにさせたのかも知れないが、理由はどうあれ、気持ちの中に“私のモーツァルト”がしっかり根付いてくれたのは嬉しいことである。

最近、代表の加藤さんとお会いする機会があり、K618の話しをしたら早速お薦めだというバーンスタイン盤のCDを頂戴してしまった。私の気持ちを察したかのように演奏時間が3分56秒と長い。私の手持ちのは3分32秒だから30秒近くも長い。至福の時間を少しでも長く享受できるようにとの温かい配慮で選んでくれたのだと思う。それにしても、3分余という時間は実にあっけない。心して聴くのであれば、余韻



ニューヨーク マンハッタンの摩天楼を見ながらハドソン川を溯上する

に身をゆだねる時間を含めてある程度の長さは欲しいと思っていたところだから、“私のモーツァルト”に耳を傾ける時間がほんの少しでも長くなったことは大歓迎で、これまた望外の嬉しさであった。(完)

#### 追記

この原稿を書き終えてから、K618がことあるうちに代表の加藤さんの会員番号であることに気付いた。なんとまあ、とため息が出たが後の祭り。それだけ自分がいいかげんな会員であることを露呈しているようなものだと思う。しかし、原稿の提出期限が迫っていて書き直すだけの時間の余裕はない。加えて、別の話題を引き出すことができるポケットなど有るはずもない。横恋慕はしても、じっと胸に秘めているだけならまだしも、好きなものは好きだからと勝手にちょっかいを出したらどうなるか?!ましてや、品位と品格を兼ね備えた代表のものに対してである。おのれ、無礼者!と破門どころか打首にもされかねない不埒であったと身を硬くしている。会員として守らなければならない最低限のマナーすら守れなかったのだから、御沙汰はいかようにも受けるカクゴである。

## 酒とモツの日々 (22)

会員番号 K488 佐藤 滋

今年はいドン没後200年の年。モーツァルトが「我が最愛の友」と呼んだことで、二人の交友関係を再検証する試みも盛んなようです。

「あなたにわたしの六人の息子をお送りします……これら長く困難な苦勞の果実を優しくお迎え下さり、彼らの父そして友となつて下さいますようお願いいたします。」

これはモーツァルトがはいドンに贈った弦楽四重奏曲（六曲からなるはいドンセット）の献辞です。同業者を評価するのに残酷なまでに厳しかった彼が書いた、もっとも謙虚で美しい文章だと思いませんか？ おそらくモーツァルトは直感的にはいドンの優れた資質を認め、弦楽四重奏の分野では先駆者だった彼の作品を研究し、2年を費やして「長く困難な苦勞の果実」としてのはいドンセットを完成させたのでしょ

う。ハイドンの方も、モーツァルトの美しい作品を研究していたようです。(特にあの素晴らしい木管楽器の用法など)

さて、このコーナーお馴染みの「酒」との関連ですが、献呈文のなかにある「長く困難な苦勞の果実」とくれば、杜氏の酒への想いを連想する人も多いのではないのでしょうか。なぜワインや洋酒ではなく日本酒なのか。それは日本酒がはるかに手間のかかる酒で(詳しくは専門書をお読み下さい)味わいにも無限の拡がりがあり、作り手の誇り、気概が一層こもっていると考えられるからです。いつもの「こじつけ」? いやいや、ネットで「モーツァルト 杜氏」で検索すると何万ものヒットがあるのです。年2回発行のこのコーナーも満10年になりますが、同じ事を感じている人もたくさんいるんですね。面白いことに杜氏には音楽愛好者が多くいて、中には演奏したり、一家言をもっている人もいられるようです。まさに、才能が才能を理解する。モーツァルトとハイドンではありませんか。こんな奥深い世界も近年はコンピュータ技術

が入り込み、モーツァルトの作品の断片や構造から新しい「モーツァルト作品」を創造したり、優れた杜氏の仕事をコンピュータに記憶させ純米吟醸の均質な製造を計画したりしているそうです。私のようなアナログ人間には、そのような研究の価値や意義は見いだせないのですが…。ハイテクによる文化芸術のクローン再生産よりも、私には命限りある作者の偉業を尊び、受け手の生活や時代という限られた環境のなかで、それぞれの作品を味わい、受け止めることが文化への礼儀だと思っています。鑑賞も一期一会なのです。今日の感動が明日は得られないかもしれない。だからこそ今日の一聴、一飲が限りなく尊いのです。

文化を味わうには偉大な才能、熟練の技への謙虚な気持ち、尊敬の念が必要だと思います。コンピュータが創作したモーツァルト、コンピュータがコントロールして製造した純米吟醸。そこにどのような感動があるのか…! 等と、口では大儀を語っていても、耳や舌は簡単に手なづけられてしまうのかもしれませんが。

## 事務局より

川野さん、素敵な旅行記のご投稿ありがとうございました。

岡部さんの詩は直観が生き生きして素晴らしいと存じました。(K618)

2009年はハイドンの没後200年にあたります。全世界的にイベントがあるかと思っておりましたが、オーストリアでは様々なイベントがあるもののそれ以外では??それほどの広がりがないように思われます。寂しい限りですね。ハイドンとモーツァルトは24歳とい

う年の差を感じさせないほどの仲であった事は皆さんもご存知でしょう。そのハイドンのために作ったというハイドン・セットは自ら演奏をしてハイドンに聞いてもらったと伝えられています。

今回のサマーコンサートでは、そのパパハイドンに因んで(モーツァルト以外は御法度を破り!)久元さんにハイドンのピアノソナタを弾いていただくことになり、「ハイドンセット」が整った記念のコンサートになることでしょうね。(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H21年7月現在110名)

入会金: ¥2,000 年会費: ¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ・・・イヤタカ内

加藤 携帯電話 090(7939)4058 又は 本田(事務局) 080(1673)8322